

定環境の日常の中に長らく浸かっていると、それが本来のようになってしまって気付かないことも多々ある。私はここのところ「気持ちにゆとりがないなあ」という自覚はあったものの、その原因についてはうまく探り当てられないまま頭が突っ走っていた。ところがきょうウーン・フォルクスオーパー交響楽団の演奏を聴きに行って、私に足りなかったものは「笑い」であったことに気付いた。思い返してみると日常で笑う機会は少ない。周りを見回すと殆ど埴輪に近い人ばかりなので、笑うのがためらわれるしバカ笑いは自己嫌悪に陥る。私が表情豊かな欧米人を見てホッとする理由も成程そこにあつたかと改めて納得する。このコンサートでは春のまどろみのような穏やかな定番環境の中で、私はさすがに足を踏み鳴らさないもののウーン風 3 拍子に乗って遠慮スイングした。最初プログラムに目を通した時は例年とちょっと違うような感じがしたが実際全体の構成が新鮮だった。因みに今年の指揮者はウーンコンセルヴァトリウム音楽大学教授で作曲家のグイド・マンクージ氏。シェーンブルン宮殿室内管弦楽団首席指揮者を経ていくつかの楽団で指揮している。そして第一部の最後の『新幹線ポルカ』は氏が日本の新幹線に乗った時の印象を書いた楽しい曲でバレエが面白かった。また日本の歌をモチーフにしたサントリー・ホール 25 周年記念ワルツ：ヨハネス・ホリク『^{いちがついちじつ}一月一日～ヨハン・シュトラウス風』によって、精神が大気圏を漂っていた私は無事日本の地上に戻ってくることが出来た。ソプラノのアンドレア・ロストさんの演技力も抜群で、首席ヴァイオリニストの大きく切れの良い演奏が心地よく響いた。またメンバーの中には数人の日本人がいたが、第 2 ヴァイオリンの男性の演奏者間の楽しそうなやり取りと笑顔が印象的だった。何より指揮者のパフォーマンスからは笑いが生まれた。但し「笑い」といっても様々である。ここでは「上質な」という言葉を付け加えておこう。まじめな計算+サービス精神がなければ心を豊かにするような上質な笑いは生まれない。当然のことながらオーケストラに漫才的笑いは不要である。笑いにも TPO がある。それはユーモアのセンスにつながる。本来真面目の粹に縛られているオーケストラの面々も演奏しながらそのセンスを楽しむのではないだろうか？その気持ちが伝導して観ている方も楽しくなり大勢が笑顔に包まれる。奥ゆかしい日本人の能面の中でも笑いは精神をリラックスさせるだろう。

そしてその円満な笑いによって突っ走り脳からようやく解放された私は、その気分の延長でピッツアが食べたくなった。パスタではいけない、どうしてもピッツアとワイン。そこでホール近隣のフレンチの店はパス—よく寄る店は白ワインの品種が好きではないのでパス—と、やはりより良質を求めて初めての店に入りピッツア・マルゲリータと白ワインを頼んだ。もちろんグラスで。ここでも不足していたものに気付いた。身体的栄養とそれがもたらす精神の充足感だ。私の日常の食事は、義務的に短時間で空腹を満たすのが第一義で栄養が大幅に偏っている。それゆえ時に肉食獣かと思うくらいの勢いでステーキにかぶりつくが、そうなるまで栄養不足によって徐々に性格がおとなしく笑いも少なくなっていることに気づかず、そのまま生きている。

笑いは心身の健康貯金であるとともに心の病の特効薬である。人は日常の中で探せない「笑い」のスイッチを藝術や旅という非日常の中に求め、無意識のうちにリセットしながら生きているのだろう。まず「笑える」というのは幸せである。(2013.1.3)